

マキノ病院ニュース

地域医療連携室について

室長 野崎 紀子
課長 嶋口 康友

今年の4月より、新たな地域医療連携室としてスタートいたしました。これからの地域医療連携室は、医療と介護の枠を超えた様々な人々や施設などを繋ぐ要となり、要介護状態になっても「可能な限り、住み慣れた地域や自宅で自分らしく生活したい」「必要なサービスを受けながら、在宅で自立した生活を続けたい」等、必要に応じてより良いサービスを提供させていただける体制が求められます。ここで当院の地域医療連携室（病診連携・入院支援）についてご説明させていただきます。

◎病診連携

他院との連携を図るために、事務手続きを一括管理して、他院との架け橋的な役割を担う部署です。具体的には、他院への紹介受診などの際に、病院内で受診予約などの調整を行ったりします。また、患者さんの待ち時間を、極力少なく調整できるように努めております。

◎入院支援

入院された患者さんが、退院時に安心して住み慣れた地域での生活に戻って療養生活ができるよう、入院時から支援を担う部署です。具体的には、医師や看護師、医療ソーシャル

ワーカーなどと在宅サービスを担当するスタッフ等が現在の治療状況や退院に向けての方針などを共有し、患者さんやご家族を支援いたします。また、病状が変化した場合の転院調整、介護事業者やケアマネジャー（介護支援専門員）からの相談・紹介受付窓口なども行っています。そして、レスパイト入院も積極的に行ってまいります。レスパイトとは、介護・介助にあたるご家族等の病気が・出産・冠婚葬祭等の事情で介護・介助が困難になった場合や、介護者の身体的・精神的な疲労により一時的な休息をとる場合に利用できる「在宅医療を支えるための入院」の事です。ただし、一定の制限等がございますので、お気軽にご相談ください。

高島市は高齢化率が県内でも高く、団塊の世代と呼ばれる世代の方たちが2025年には75歳以上（後期高齢者）となり、高齢者の割合も高くなります。逆に出生率は低下し、人口減少となる状況にあり、そのため高齢者夫婦での老々介護や高齢者独居による生活困難者など、自宅での生活やその他の問題も多く起きると予想されます。当院は、地域に開かれた病院として、この度、地域医療連携室を強化・整備し、他院や他施設との医療連携、或いは介護、福祉、保健などとの様々な連携を図り、地域の皆様に安心して生活して頂けるよう努めて参りたいと思っております。

診療科のご案内
 内科・外科・小児科・整形外科・皮膚科・神経内科・総合診療科
 肛門外科・泌尿器科・リハビリテーション科・リウマチ科・放射線科
 【救急指定・労災指定】【人間ドック・各種健診】

— 診療受付時間 —
 平日 8:30 ~ 12:00 16:40 ~ 19:00 土曜日 8:30 ~ 12:00
 滋賀県高島市マキノ町新保 1097 TEL 0740-27-0099
 ホームページ <http://www.makino-hosp.or.jp>

ドクターコーナー



様々な経緯もあり、病院側からのご希望もいただき、再度高島市にて働くこととなりました。林と申します。自身もまだ小さい子供の父親でもあり、可能な範囲で再度マキノ病院のお役に立ちたいと考えています。

コロナというイベントが起こり早4年も経ち、病院もどこもクラスターの維持が難しくなってきた中で、病院もその中に含まれてはいます。

ご挨拶と「命のバトン」

内科 林 修平

令和5年はコロナ診療に対し感染症のくくりも2類から5類への引き下げもあり、診療報酬面でも大きな変化をもたらします。今後クリニック等でも盛んに発熱外来をされた箇所でも正直どう動いてくるのか、また総じて検査件数もどうかの予想がつかない。ただ根本治療は有効的なものは現在もなく、対症療法が主体となる現実はこのままからまだ暫くは変わりはないことではある。私も医師になって20年前後経ち、なりたての時期から比較しても、入院・外来患者さんの高齢化や、単身で生活されている方や、親族様がいても遠くで生活されている方が増えてきたなということを感じています。

高島市のシステムとして「命のバトン」というのがあることをご存じでしょうか？ プラスチックでできた筒を冷蔵庫に入れておくというシンプルな物なのですが、その中に身内の住所や電話番号、今までの病歴やアレルギー・お薬手帳のコピー、他にも何かあった時の個人的な意思表示を記入したメモも入れておけます。目のつくところにステッカーを貼っておき冷蔵庫にしまっておくと、単身で生活して急な変化があったときに、救急隊は冷蔵庫を見てくれて病院と一緒に持って行ってくれるという物です。少し前、同じようなものを国がマイナンバーカードを使用するのかもしれないが考えているという記事を見ました。時代の流れだなーと感じたとともに、高島で実際救急を受ける立場にあっても、「命のバトン」を持参される方は2割にも満たない印象です。初めて病院に来た時「おおう」と驚いた、せつか

くある良いシステムなので、家族様とも事前に相談の機会を持つなどして、もっと積極的に使っていく意思表示して欲しいと思います。外来に情報として持参していただいても非常に役に立つと思いますし、特に救急では夜間を始め非常にも助かる場面も多いです。高島市役所の社会福祉課に相談し、民生委員児童委員協議会、地区担当者から頂く流れとなっております。一度ご検討してみてください。

これから再度入院や外来や検査等でお顔を合わせる事もあると思いますが、一緒に調べながらも考え悩む、そんな姿勢で診療させていただきたいと考えています。よろしくお願いたします。